

トップと語ろう!

10年間にわたりトップとしてソニーを率いたのち、コンサルティング会社「クオンタムリープ」を立ち上げた出井伸之氏。就職、起業、教育、そして会社の本質について——企業経営のすべてを知り尽くした出井氏に、大学3年生の2人が聞いた



いでのぶゆき / 1937年東京生まれ。60年、早稲田大学政治経済学部を卒業し、ソニーに入社。スイス、フランス赴任を経て、オーディオ事業本部長、ホームビデオ事業本部長を歴任。89年に取締役、95年に代表取締役社長に就任。その後、CEO、代表取締役会長兼CEO、取締役代表執行役会長兼グループCEO、最高顧問を経て、アドバイザリーボード議長に。06年9月、クオンタムリープを設立。代表取締役CEOとなる。

クオンタムリープ代表取締役

起業するには チーム作りを学ぶことが必要

小松 現在、出井さんが代表取締役を務めていらっしゃるクオンタムリープとは、どのような会社なのですか。

出井 事業内容は主に三つです。一つは経営者が企業の成長戦略を立てるお手伝いをする事、二つ目がベンチャー企業を支援すること、そして三つ目が次世代の技術のビジネス化支援です。たんなるコンサルティング会社ではなく、ビジネスのプロデューサー、人材養成、企業育成と、幅広い事業をやっています。

トップと語ろう! NOBUYUKI IDEI

鹿島 僕は、将来的に起業したいという希望を持っているので、なかでも「ベンチャー企業の支援」に興味があります。具体的にはどのようなことをされているのですか。

な鯉になってもらおうというわけ
出井 出井さんは、ソニーのトップを退かれて、自分で会社を興されたわけですね。僕のように、将来的に起業を目指す学生にアドバイスをいただけますか。

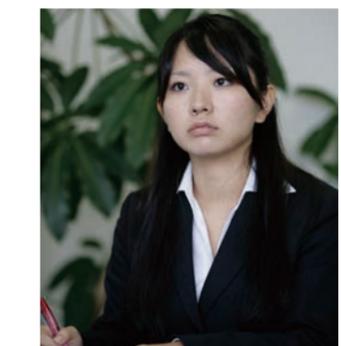


「独力ですべてはできない。大切なのはチームプレー」

思っている人が多いです。チームなど必要ない、独力で成功できると考えてしまっただね。でも、自分の投げたボールを自分では捕れませんよ。必ずそこにはチームプレーが必要とされる。だから起業を目指す人は、まずはチームの作り方を学んで、誰と、どういうチームを結成するのかをじっくり



二ーを選ばれた決め手は何だったのですか。
出井 僕が大学生のころ、ソニーはたいへん小さな会社でした。小さいということは、これから伸びる可能性があるということです。そういう会社に入れば、いろいろなことができるのではないかと考えた。それが一番の決め手ですね。それから、ヨーロッパで働いてみたいという夢もあって、ソニーならそれができると思った。
僕の同級生はみんな、もっと大きな企業を狙っていたし、海外勤務するならアメリカだと考えていました。でも、僕はそうではなかった。そのころから「逆張り」が好きだったんだね。今も昔も、人と同じことはやりたくないという性格なんです。進路を決める際に、自分が「順張り」に向いているか「逆張り」に向いているかを知っておくことは、たいへん重要だと思いますよ。



鹿島 ソニーという組織の中で学んだ一番大きなことは何ですか。
出井 企業とは、独立した生命体であるということです。企業には命がある。その中で、同じく生命体である社員が働いている。つまりそこには、「生命の二重性」があるわけです。その二種類の生命がうまく折り合わないと、会社は決してうまくいかないし、社員も幸福になれません。
だから、これから就職する人たちは、「生体拒絶反応」が起きないような会社を選ぶことが重要です。自分は伝統的な会社に向いているのか、新興企業に向いているのか、大きな会社で働きたいのか、小さい会社で働きたいのか……。そういうことをしっかり考えて就職活動をしてほしいね。
僕がソニーという小さな会社を選んだのは、会社の成長と競争してみたいと思ったからです。会社の成長のスピードに負けないくら

いに自分も成長してやろうと思つた。いわば、会社と対等に付き合おうと考えた。それが結果的に自分のためにもなつたし、会社のためにもなつたと思います。

小松 より良い社会人生活を送るために、学生時代に身に付けておくべきことは何だと思えますか。

出井 問題意識を持つことでしょうか。便利な検索エンジンがあつても、何が検索したのか分からなければ検索はできないでしょう。何を本当に知りたいのか、自分にとって何が本当に必要なのか。それを常に考える意識を身に付けてほしいですね。

僕はこの年齢になつても、問題意識や好奇心を絶やさないように心がけています。そのための方法の一つが、頭の中に常に空白を作っておくということです。空白のスペースがあれば、新しいものをキャッチしたときに、すぐにそこに収納できるからね。

それから、「これだけは誰にも負けない」というものを見つけておくこと。これも重要です。何でもいいんですよ。花でもワインでも音楽でも、本当にそれが好きで、それに関する知識なら誰にも負けない。そういうものがあれば、社会人になつてから必ず生きます。「好きこそものの上手なれ」とい



会社の成長に負けないくらい自分も成長してやろうと思つた

言葉があるでしょう。本当に好きなものがある人とそうでない人には、生きていく上で大きな差が出ると思えますね。

学生のうちからアクティブに行動すべき

小松 私は、教育関係の仕事に携わっていきなさいという希望を持っています。今の日本の教育の現状をどう思われますか。

出井 日本の教育が一番おかしいと思うのは、理系と文系を完全に分けて、専門を細かく決めてしまつていてことですね。学生も専門は一つでなければいけないと思ひ込んでいます。経済を勉強している人は、経済だけを知っていればいいというわけです。しかしこれは、複数の代は、複数の専門性を持つことが絶対に必要になりますよ。

そのためには、教育のシステムを変える必要があるでしょうね。今のシステムだと、高校の三年と大学の二年でほとんど同じような一般教養を勉強しています。そのために、専門を学ぶ時間があまりとれない。一般的な教養プログラムは高校ですべて済ませて、大学に入つたらすぐに専門的な勉強を

すべきだと僕は考えています。そうすれば、複数の専門課程を勉強することができるようになる。アメリカではそれが普通です。

それから、入学試験のために勉強して、大学に入ったらほとんど勉強しなくなるというのも、日本の教育のおかしなところですね。試験のための勉強は、すべて記憶重視でしょう。そういう勉強しかしていいないと、社会に出てからとても苦勞することになります。大学時代から、社会の仕組みなどを学習する機会がもつとあつていいと思いますね。

鹿島 幅広くいろいろなことを学びたいと考えている学生はたくさんいると思います。でも、学ぶ場がなかなか得られないという現状もあるのではないのでしょうか。

出井 やる気さえあれば、何だつてできるんじゃないかな。今の日本の多くの大学では、卒業するのにそれほどの労力を必要としないでしょう。残つた力を何のために使うか。それを本気で考えた方がいいね。大学が提供しているさまざまな仕組みをもつと活用してみるとか、興味がある分野の第一人者に会いに行つてみるとか。学生のうちから、そうやってどんどんアクティブに行動していいですね。

取材を終えて



鹿島健太くん
かしま・けんた
法政大学工学部経営工学科3年。金融・コンサル・商社を志望。春から、数社のインターンシップを経験。

行動範囲を制約しないように気をつけたいです

大学生のとき、ご自身の性格をしっかりとして理解して就職された話や、ソニーでの仕事のスタンスの話などを伺い、自分自身を振り返るきっかけをいただきました。自らの行動範囲を制約せずに、積極的に学んでいきたいです。



小松枝里沙さん
こまつ・えりさ
中央大学法学部政治学科3年。大学生活はサークル活動が中心。将来は地方教育に携わりたいと考えている。

何ごとにも好奇心を持てるよう頭の空白を大切にしたい

出井さんのように経済界の第一線で活躍されている方でも、大切にしているものは、信頼できる友人や仲間なのだなと感じました。私も、常に問題意識を持ち、頭に空白を作って何ごとにも好奇心を持ちたいなと思います。